

旭川文学資料友の会 第36号

友の会通信



発行・NPO法人 旭川文学資料友の会
〒070-0044
旭川市常磐公園 旭川市常磐館内
電話 0166-22-3334
<https://www.abst-thonokai.jp/>
印刷・株式会社あいわプリント

漢字の読み方〈承前〉

旭川文学資料館館長

三原 一仁

たとえば「情緒」という言葉。旭川にもこの誌名の詩誌がありました。これは「ジョウチヨ」と読むのが一般的ですが、「ジョウシヨ」がもともとの読みで、ジョウチヨは慣用読みなのです。同じく「端緒」は「タンチヨ」ではなく「タンシヨ」です。しかし、一般的に通用しているこれらの慣用読みは、間違った読みとはいえません。

「施行」や「施工」はどうでしょう。これは「シコウ」でも「セコウ」でも問題ないようです。とりわけ「施行」は、法律用語としては「セコウ」というらしいので、役所関係や議会での議論ではそちらを耳にすることが多いようです。

漢字はもちろん中国が起源で、そのはじめはご存知の甲骨文字。亀の甲羅や牛などの肩甲骨に占いの結果を刻んだものだといえます。漢字の字形が定まってくるのは金文(きんぶん)といつて文字が青銅器に鑄込まれるようになった頃からです。ですから漢字の古い字形は金文を原点としてかえりみることになります。

そこから篆書が生まれ、筆と紙の発達とともに、さまざまな書体で文字が書かれるようになったのでしよう。やがてそれが行書や草書となり、流麗な書き手が多数現れたのですが、それとともに元の字形をはっきりさせるものとして楷書もみられるようになりました。

言うまでもないことですが、漢字は一般に画数が多いですから、書くのがやっかいです。速書したいのに不都合だったり、うごともあります。それで時には癖のある勝手な崩し方をするものもあって、ついには解読に困難をきわめることもありました。そこ

で、それらを後世の人が解読するために復元した時に、いくらかの判読違いはありがちなことで、つまり復元に誤差が生じることがあっても不思議ではないわけです。いわゆる一部の俗字はそうして生まれたとも考えられます。

俗字というのは、「高」のハシゴダカとか、「吉」の上の部分が土ではなく「土」だとか、「崎」の右側の旁(つくり)の部分の上が大ではなく「立」だとかいうたぐいの字形です。かくいう私の三原の「原」も「点がないハラ」だといわれてきましたが、この字は崖下に水が湧いて草が茂った土地になったという意味の字で、「泉」と泉が合わさった字ですから、泉という字には頂点に点が付いているように、「原」には「点がある」のが本来の正字なのです。

ついでですが、大陸中国の簡体字も俗字の一種と捉えられているようです。

また、異体字というのもありますね。これは正字と同じように扱われますが俗字の一種とされることもあって、たとえば「峰」と「峯」、「嶋」と「寫」、「群」と「羣」などがそうです。

いずれにせよ、俗字は誤字とは考えないのが通例です。

「旭川文学資料友の会25周年記念展」について

- I期 二〇二五年六月三日～八月三〇日
- II期 九月十六日～十一月二十二日
- III期 十二月十六日～二月二十八日



25周年記念展チラシ 制作 川原 潤

沓澤 章 俊

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。と『奥の細道』で芭蕉が書いたように、月日が経つのはあつと言う間で無常でもある。また、『莊子』齊物論篇にある胡蝶の夢のように、自分の存在や来歴も、現実か、はたまた夢だったのか振り返ると区別がつかなくなる。旭川文学資料館を運営する旭川文学資料友の会発足から四半世紀が経った。一世紀の四分の一なので、よくここまで来たなあ、という気持ち。

今年度はその四半世紀(二十五年)を記念して、当館が所蔵する各分野の貴重な資料を三期に分けて展示している。各期を通してみ

ると、実に興味深い資料が多くあることに今更ながら気付かせられる。

第一期は小説、評論、翻訳、児童文学の十五名を紹介(安部公房、石川郁夫、井上靖、岡田勝美、佐藤喜一、戸沢みどり、宮之内一平、木野工、八匠衆一、板東三百、三好文夫、三浦綾子、高野斗志美、米川正夫、諸角和儔)。

第二期は詩の分野の十三名(小熊秀雄、相川正義、今野大力、鈴木政輝、小池栄壽、入江好之、武田隆子、桜井勝美、下村保太郎、新井田キヨノ、富田正一、小野寺与吉、佐藤比左良)。

そして現在開催中の第三期は短歌、俳句、川柳、五行歌の二十一名を紹介(齋藤瀏、齋藤史、酒井廣治、飯田佳吉、中山勝、松田一夫、小林孝虎、石田雨圃子、伊藤凍魚、藤田旭山、大塚千々二、高橋貞俊、後藤軒太郎、坂本タカ女、新明紫明、深谷雄大、敦賀夢夢、加藤破天光、佐藤鶯溪、大野信夫、草壁焰太)。

各期の展示物は、各文人のプロフィール、作品、作品掲載誌、直筆の原稿、色紙、短冊等々。期間中の総展示点数は八一五点。第二期から隣接するミニ展示室で、当館所蔵の貴重な美術関係資料約一〇〇点も展示しており、総計九一六点になる。これらの資料は、二十五周年を記念して発行した、旭川文学資料館図録『旭川ゆかりの文学』にほぼ掲載されている。

関連イベントとしては「手づくり本講座」を七月二十六日と八月二日に二回実施した。場所は常磐館キッズルーム(旧プラネタリウム)で講師は黒田忠理事。二十五名が



「手づくり本講座」の様子 キッズルームにて

参加し、昨年実施した豆本づくり講座同様、はじめての体験でとても楽しかったという感想を沢山いただいた。



講演する東延江氏

十月四日には、常磐館二階講堂で記念講演会を実施。講師は旭川文学資料館前館長で詩人の東延江氏。演題は「旭川ミニ詩壇史」。実際に交流した旭川の詩人たちについて、面白いエピソードを交えての内容に、数人の方からの熱心な質問もあり、充実した時間となった。参加者三十五名。講演会後に、もっと話を聴きたいという声があり、毎月第三土曜日に「旭川詩壇史を語る会」を実施することとなった。毎年一回のノーベル文学賞、年二回の芥川賞・直木賞、そしてここ旭川で決められる小熊秀雄賞等々、また、文豪の新資料発見ほか、

文学の話題がメディアで扱われることも度々。当館の存在は、地味、つまり地の味がないが、もしかしたら味付けが不十分かも知れないが、よくよく味わってみると実に美味しく滋養のある資料群を所蔵・展示しているの
で、今後、より彩りを添えてこの地域からの文学発信を拡大していきたい。

図録『旭川ゆかりの文学』掲載色紙のミニ企画展について

旭川文学資料友の会理事

黒田 忠

昨年は旭川文学資料友の会が創立二十五周年をむかえ、記念行事の企画展として、当館所蔵の貴重な資料をジャンル別に三期にわけて「旭川文学資料友の会二十五周年記念展」として開催されています。第一期は令和七年六月三日から八月三〇日まで小説・評論・児童文学等、第二期は九月十六日から十一月二十二日まで詩、第三期は十二月十六日から令和八年二月二十八日まで短歌・俳句・川柳・五行歌の各分野ごとに企画展を実施しています。記念行事の一環として作成した旭川文学資料館図録『旭川ゆかりの文学』に掲載している内容に沿って紹介しています。この図録を手にした方から「旭川文学資料館には著名

な画家の色紙もたくさん所蔵しているのですね。美術館にあつてもおかしくない貴重なものですね。」などというお言葉をいただき、普段は文学館ということからなかなかこの方々の色紙については紹介する機会がなかったことから、第二期の開催からミニ企画展の会場に画家の色紙を中心に展示紹介することになりました。旭川文学資料館図録『旭川ゆかりの文学』の表紙を飾った色紙の高橋北修は、本道で最初に帝展に入選した画家で「大雪山の北修」といわれ、詩人・小熊秀雄とも親交のあつた画家です。朝倉力男は、雪を題材に北海道の厳しい自然を描き続けた画家で、旭川医大病院のロビーにも大作が飾られています。一原有徳は小樽市の版画家で、登山家でもあります。小樽市美術館には彼のコーナーが設けられています。畦地梅太郎は情感あふれる「山」「山男」を描き続けて版画家としてよく知られています。愛媛県宇和島市には彼の記念美術館があります。佐藤忠良は彫刻のまち旭川では良く知られている彫刻家です。関兵衛は高橋北修とともにヌタツクカムシュッペ画会を創立した画家です。外山卯三郎は、北大予科で相川正義と同窓で親交があつた美術評論家です。当館所蔵の資料の著書は、彼が相川正義に謹呈した著書で、今では貴重なものです。難波田龍起（なんばたつおき）は旭川生まれの抽象画家で、彼の父難波田憲欽（なんばたのりよし）は明治期、屯田兵の中隊

長の時に旭川市などで河川改修に尽力しました。その功績から「難波田川・橋」が現存しています。彼は一歳で東京に転出しましたが、旭川に何度も訪れ、村山陽一などに影響を与えたといわれています。生誕一二〇年に当たる昨年は東京で彼の大規模な展覧会が開催されています。当館所蔵のスケッチ画は、新聞用のカット画として描かれたもののように、大阪の名所が描かれたデッサン画です。丸木俊は丸木位里と共同で『原爆の図』を描いた画家で空知管内秩父別の善性寺の長女として生まれ、旭川高等女学校（現旭川西高等学校）を卒業し、東京の女子美術専門学校を卒業しました。当館所蔵の色紙は、果物を題材とした柔らかな色彩の絵です。その他に人物を描いた絵を展示しています。丸木俊のコーナーには彼女の著書や絵本なども展示しています。展示をしてから彼女の絵が『郷土誌あさひかわ』の二〇〇〇年三月一日発行の表紙を飾っているということを教えていただき、追加展示しました。昨年十一月には詩人の故佐藤比左良さんの奥様から大量の蔵書の寄贈を受けた本の中に丸木俊・丸木位里の『原爆の図』がありその本の表紙を開いたところ、旭川で開催された『原爆の図展覧会』のパンフレットが出てきたのです。埼玉県東松山市の『原爆の図丸木美術館』は二〇二五年九月二十八日から改修工事のために休館中で、リニューアルオープンは二〇二七年五月五日頃

の予定ということですが、『原爆の図丸木美術館』の理事・学芸員の岡村幸宣(おかむらゆきのり)さんが膨大な資料や聞き取りで執筆された著書『原爆の図』全国巡回―占領下、100万人が観た!』(二〇一五年新宿書房刊)の巡回会場の一覧において、一九五一年(昭和二六)年、旭川市、丸木位里・俊とのことで旭川で開催された巡回展の詳細についての記述があります。今回見つかった旭川会場の巡回展のパンフレットには、

丸木位里・赤松俊子(旧姓)画伯共同制作
原爆の図 五部作展覧会

会期…十一月三日(土)〜七日(水)

会場…旭川市・マルカツ百貨店三階

会費…一般十円・学生子供四円九十九銭

主催…旭川純生美術会・北海道アンデパンダ

ン美術協会・旭川平和問題懇談会

賛同発起人…二十七名連名、主な人 坂東幸

太郎(当時の旭川市長)、中野了

應、谷口廣志、高橋北修、鈴木

政輝、佐藤喜一、五十嵐廣三、

朝倉力男

裏面には、原爆の図目録とあり五部作のそれぞれの作品解説があり、その初めに次のような文章がありました。

「八月六日、私たちは伯父を失い、姪を殺しました。数多くの親しい近しい人々を失いました。わたしたちは死んでいった人々のめいふくを祈るために、生きながらえらるべき命を、

人間の科学の力で断たねばならなかった最大の不幸を描き残さねばならぬと思いたちました。画面の中で一人死に二人倒れ、血を吐くもの焼けただれて泣き、おろおろと歩くもの、黒くこげた赤ん坊、私たちは一人描いてはぞつとし、二人描いては胸を痛め、幾度か筆をおこうと考えました。しかし又描かねばならぬとむちうち続けました。一部作で五十人、二部作で四十三人、三部作で七十人の人を描きました。私たちは描き疲れる程でありました。だが死んでいった人々は幾十万、その悲しみは深く如何に大きいものであったかということに気がつきました。死んでいった人々は、それが原子爆弾であったということも知らずに、何も知らず知らざれずにうじと空腹の中に呆けてくちていったのであります。」

一九五一(昭和二六)年は、サンフランシスコ平和条約の発効(一九五二年四月二十八日)前であり、SCAP・GHQの占領下において言論統制等厳しい中で実施された『原爆の図 五部作展覧会』が旭川でも開催されたことは意義深いことと思います。丸木俊の著書の中に、旭川巡回展のことについて触れた文章があり、当時の旭川市長坂東幸太郎とは遠縁に当たり、開催について応援してもらい署名ももらった。会場には人が押し寄せ、木製の床が抜けるのではないかと心配され、入場整理を行ったとのエピソードが載っています。

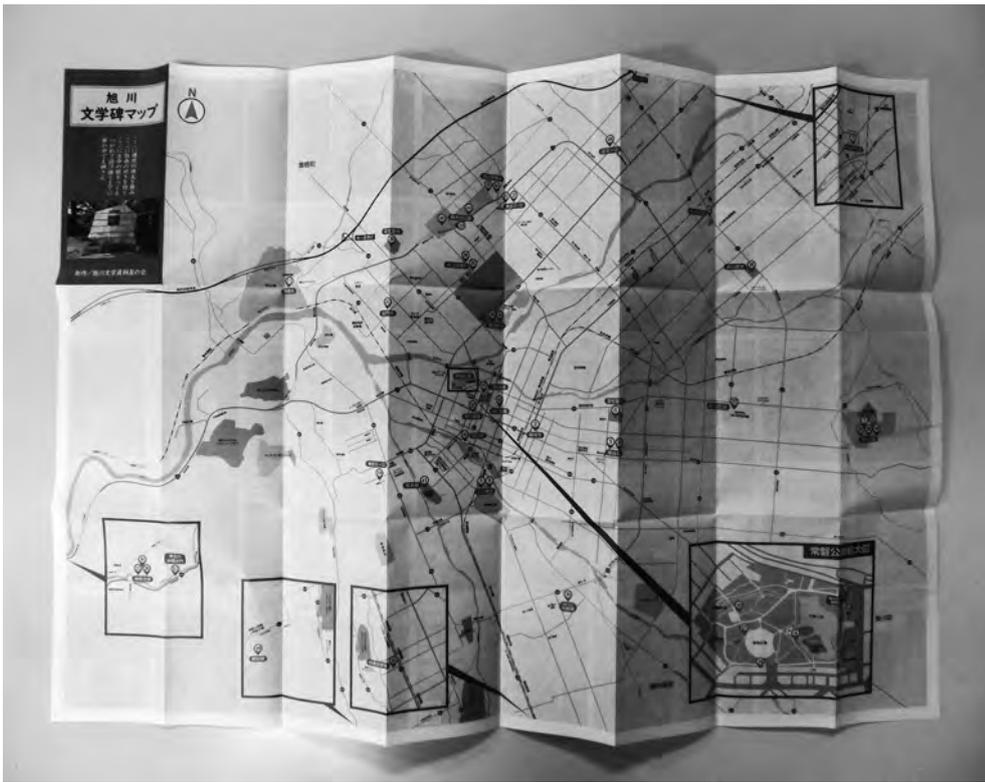
旭川巡回展のパンフレットがこのタイムミンで見つかったことも、賛同発起人として名前を連ねた高橋北修、朝倉力男の色紙・資料と共に展示紹介する機会を得たことも、単なる偶然ではないように思えます。丸木俊も賛同発起人に感謝の言葉を述べ、巡回展の思い出話に花が咲いていることと思います。色紙などの展示は令和八年二月二十八日までです。この機会に展示の裏側に思いをはせ、是非多くの市民の方々に来場していただき、ご覧下さい。会場に今回見つかったパンフレットのコピー(現物は傷みが激しいので)も展示しています。



旭川で開催された『原爆の図展覧会』のパンフレット

旭川文学碑マップを作製しました

来館者の方々からの要望もあり、友の会二十五周年を記念して「旭川文学碑マップ」を作製しました。両面カラー、B2サイズ、折



るとポケットに入る大きさです。四十九基の碑の場所を片面の市内地図上に①～④の番号で記載。

もう片面には各碑の画像、碑文と共に、所在地、碑の種類、建立年月日、QRコードも入れました。旭川文学資料館にて五百円で頒

布しています。これを片手に徒歩や自転車などで文学碑巡りを楽しんではいかがでしょうか。



次年度事業計画・企画展案

◆第二十九回旭川文学資料展

「岡田勝美と『旭川のふだん記』展

会期 二〇二六年四月七日(火)

六月二十七日(土)

・一九八〇(昭和五五)年の創刊号から二〇二一(令和三)年七四号(終刊号)まで、文集『旭川のふだん記』を発行し続けた岡田勝美の生涯と作品を紹介します。

【岡田勝美・略歴】



一九二八(昭和三)年一月二十三日、十勝郡浦幌生まれ。翌年土幌村(現河東郡土幌町)

に転居。昭和二十年陸軍予科士官学校に入學し敗戦を迎える。翌年東京高等師範学校に入學、昭和二十五年同校を卒業し旭川東高等学校に着任。翌年幼なじみの河合慶子と結婚。昭和二十七年文芸同人誌「風土」を編集発行。その後岩内高校、旭川商業高校で教壇に立つ。昭和五十五年「ふだん記」の運動を開始。この運動は昭和四十三年東京八王子の橋本義夫が「庶民自らが庶民の歴史(自分史)を記録する」と提唱し始まったもので、普段着の気持ちで身近な出来事や人生体験などを文章に綴り文集を発行。旭川では、橋本義夫や色

川大吉の影響を受けた岡田勝美が中心となり北海道で三番目のグループとして発足。以来慶子夫人と二人三脚で編集作業に取り組み四十一年間発行し続けた。



『旭川のふだん記』創刊号。編集 柴田貞夫・岡田勝美 昭和55年9月14日 発行『ふだん記』旭川グループ

〔旭川文学資料館図録「旭川ゆかりの文学」より〕

◆企画展「神居古潭と文学」

会期 二〇二六年七月二十一日(火)

十一月二十八日(土)

・現在旭川八景に選定されている神居古潭と文学について展示紹介します。小説家の岩野泡鳴や歌人の九条武子らが立ち寄り作品にもこの場所を書き残しています。かつては駅舎沿いに旅館、土産屋があり道内有数の観光地でした。戦後昭和期に旧線路跡がサイクリングロード(現在は通行止め)となり多くの人が訪れました。北海道指定史跡の竪穴住居遺跡やストーンサークル、神居古潭おう穴群、カムイコタン伝承、数基の文学碑などがあり、各分野の研究資源が多い場所です。

◆ミニ企画展「旭川の新進・俊英歌人」

会期 二〇二六年六月〜八月

・六月二十一日に実施される、旭川歌人クラブ主催の研修イベント「旭川の俊英歌人によるパネルディスカッション」にあわせて、旭川の注目すべき新進気鋭の歌人を紹介します。

◆ミニ企画展「小熊秀雄と長長忌」

会期 二〇二六年九月〜十二月

・詩人 小熊秀雄を偲び、その意思を継ぐため彼の忌日である十一月二十日前後に毎年開催されている「長長忌」は小熊の長編詩「長長秋夜」にちなんでいます。今年は旭川で開催しますので、当館所蔵の長長忌関係資料等を展示します。

〔ご案内〕

「旭川詩壇史を語る会」

実施日 毎月第三土曜日 午後二時から。
場所 旭川文学資料館地階 交流室
・詩人で旭川文学資料館前館長の東延江氏を講師として、旭川の詩界を中心に、街並み、建物、喫茶店、食堂、風景等について、肩の凝らないお話を聴く会です。
参加無料、定員十数名です。

旭川歌人クラブより

旭川歌人クラブについて

旭川歌人クラブ会長

桑原 憂太郎

「旭川歌人クラブ」は、旭川および旭川近郊の短歌を愛好する人たちの親睦や交流を目的として、活動をしている団体である。

発足は一九八八年なので、今年で三十八年目となる。昭和・平成・令和と、そこそこ長く活動をしている団体といえる。かつては、「旭川文学資料友の会」の副会長であった故西勝洋一が、本クラブの会長をつとめていたこともあり、「友の会」さんのお付き合いは長く、今でも、何かとお世話になつてい

る。短歌を愛好する人たちの集まりであるから、活動といえば、歌会だ。会員が自作の短歌を持ち寄つて、歌会をする。これが年に一回。十月に「全旭川短歌大会」と称して行われている。優秀作品は、参加者の投票で上位になつた数作品が選ばれて、作品の作者は表彰される。そこでもらえる賞状や盾はなかなか立派なもので、選ばれたことのない私とし

ては、表彰される会員がとてもうらやましい。それはともかく、本クラブの大きな活動のもう一つは、研修会。こちらも毎年一回、旭川市内外から講師を招いて講演会や、会員相互によるワークショップといったようなものを企画して、会員の研鑽に寄与している。今年二〇二六年の研修会は、「旭川の俊英歌人によるパネルディスカッション」というのを企画した。

今をときめく旭川の三人の歌人、柳澤美晴さん、塚田千束さん、井口可奈さんに登壇してもらい、現代の短歌について、縦横無尽に語つてもらおうという企画である。この三名は、それぞれ全国的な短歌賞を受賞し、大きな活躍が期待されている歌人だ。そんな全国的に注目されている歌人が、ここ旭川市には三人もいるんですよ。すごいでしょう。そのすごい三人に短歌について討論してもらおうというのが、今年の研修会だ。

こちらは、一般の方の参加も大歓迎。短歌をよく知らないという人にも、絶対に満足していただけるような企画となっておりますので、どうぞ気軽な気持ちでご参加ください。また、このパネルディスカッションは、「旭川文学資料友の会」さんに協賛をいただいておりますので、そのうち詳しい内容が、皆さんの目に触れるようになると思います。とりあえず、日には、六月二十一日(日)、

午後二時から。場所は、ときわ市民ホールです。参加料は五百円の予定です。

どうぞ、皆さんのご参加をお待ちしております。そして、これを機会に、短歌に親しんでみようかなあ、という方がもしいらつしゃいましたら、本クラブとしましては、それはそれは望外の幸せでございます。



旭川歌人クラブ会長の桑原憂太郎と事務局の大関法子

資料館だより

受贈資料(敬称略)

(二〇二五・八〜二〇二六・一)

・岡和田 晃

『Perpetual Peace Poems from Hiroshima, Nagasaki, and Okinawa』

・池田 忠義
・及川 元人

池田忠義『北国の片隅で』
鉱物・化石専門雑誌「ミネラ」各号(及川元人「宮沢賢治「旭川」その足跡をたどって」他掲載)

・田中 綾

田中綾『書棚から歌を 2021-2025』

・長田 典子
・倉地 智哉

長田典子詩集『锚水』
『文藝空間』十八号、「解釈」二〇二五年四号、「西日本国語国文学」十二号

・加門サダ子
・森内 伝

『舷燈俳句会合同句集』
『嵐山小中学校 開校六十周年記念誌』、詩誌「青芽」一七八〜二〇八号

・戸島 雅子
・岩永眞佐子
・丁 章

三浦綾子色紙 二点
渡辺軍寿『日本刀』
『知ってるつもり? 在日コリアンQ&A』

・和田 裕

文芸誌「視線」創刊四十周年記念号

・三品 純一

『歌碑(うたのいしづみ)』
旭川五行歌の会三百回記念歌集

・星 まゆみ
・十河 宣洋
・佐藤 蓉子

星まゆみ詩集『雪あかり』
『源流・イナズマ合同句集』
葉山嘉樹『葉山嘉樹日記』、
『宮沢賢治農民芸術概論綱要』
(花巻市教育委員会)他、全集
含め多数

・崎本 昇一

小熊つね子書簡(実兄 崎本泰輔宛て) 四通

・岡本 敦子

(江口建二氏旧蔵資料)旭川中央小記念誌・文集、旭川西高・北高・商業高校、旭川学芸大
学文芸誌他多数

・旭川点訳朋の会

『50年のあゆみ「点」』

・中屋 利夫

木野工使用のマフラー(ラベンダー色)、『荒井建設百二十年史』

・松原 泰子

桜木紫乃『家族じまい』、三島有紀子『ぶどうのなみだ』

・森下 辰衛

三浦綾子読書会紀要「綾果」三号他

・渡部 利明

業界誌『TheleMonde』(渡部利明編) 五十六号

・堀川 夢

堀川夢編『北海道SFアンソロジー』無数の足跡を追いかけて

・岡村 幸宣

岡村幸宣『原爆の凶』全国巡回1占領下、100万人が観た!

その他、各文芸誌、歌誌、俳誌、詩誌他、各地文学館、記念館報等、沢山の御寄贈を賜りました。心よりお礼申し上げます。

※前号で、倉地智哉様のお名前が間違っていました。お詫び申し上げます。
(誤) 倉地 智也 (正) 倉地 智哉

友の会人事動向(敬称略)

【新入会員】 荒木 晶子

【現在会員数】(一月末現在)
一七〇名(うち法人七件)

編集後記

寒さ厳しい旭川の二月ですが、一日ずつ日の長さや陽の暖かさが感じられるようになってきました。皆さまお過ごし地域はいかがでしたでしょうか。

現在資料館では本会報に詳しくお知らせの通り、友の会二十五周年記念企画展のⅢ期として「短歌・俳句・川柳・五行歌」を開催中です。資料館所蔵の貴重資料の展示と共にミニ企画展として所蔵の著名な画家の色紙の展示も併せて二月二十八日まで展示しております。

まだまだ寒く足元の悪い中ではありますが是非お越しく下さい。

なお新年度も充実した内容の展示を企画中です。今年も旭川文学資料館へのご来館をお待ちしております。(ま)